

新教育運動とメタファー

— ツィンマーマンにおける「太陽」のメタファーを軸として —

伊藤 敏子

New Education and Metaphor

— The Sun Metaphor in Werner Zimmermann's Work —

Toshiko ITO

Abstract

The sun is the image of truth. The sun as an image of reason was a dominant metaphor among educators of the Enlightenment period. Towards the end of the 19th century, the metaphor regained popularity as an image of sensibility among reformative educators, many of whom cultivated mystical ideas. Their influence on education in general was slight, but Werner Zimmermann (1893-1982), a Swiss teacher turned life-style reformer, gained in 1922, as Wolfgang R. Krabbe (1942-) pointed out, widespread attention through his book "Lichtwärts (Toward the Light)", in which he stated that education should aim at forming "sunny" characters. Typical for the era, the sun metaphor in Zimmermann's educational thoughts is inspired by an eclectic syncretism which attempts to fuse western and eastern religions.

1. 世紀転換期の改革運動における「太陽」のメタファー

19世紀から20世紀への移行期は、—これを「世紀末 (fin de siècle)」と呼びデカダンス、頹廢といったイメージを共振させて時代の終焉を思い描いていたフランスとは対照的に—ドイツでは「世紀転換期 (Jahrhundertwende)」という呼称からうかがえるように再生、新生といったイメージをともなう新しい時代の幕開けを意識させるものであった。¹ ドイツではこうした時代背景におかれた新しい時代のあり方をめぐる思索が進められ、急速に台頭してきた資本主義に抵抗するため、あるいは人間の本性を害する文明化のうねりのなかで資本主義と共産主義

¹ 上山 1994、3-6 頁参照。フランスでは 1888 年にパリの風俗劇場でジュヴェノ (F. de Jouvenot) とミカール (H. Micard) によって『世紀末 (fin de siècle)』という喜劇が上演され、「世紀末」という表現のもとにこの劇のもつ不健康な空気とその時代の空気が重ね合わせて理解されていたのに対して、ドイツではその一年後の 1889 年にベルリンの結社「自由舞台」とハウプトマン (Gerhart Hauptmann, 1862-1946) によって『日の出前 (Vor Sonnenaufgang)』という社会劇が上演され、まさに世紀の若返りと生まれ変わりという印象が強く刻み込まれることになる。

に抗する第三の道の可能性を提起するため、「自由と太陽 (Freiheit und Sonne)」²をメタファーとする未来を指向するさまざまな改革運動が生起する。

この時代の工業化・都市化に起因する病理を解消するため菜食主義、反アルコール主義、自然療法、衣服改革、裸体主義、土地改革、体操・スポーツの推進といったホリスティック³なかたちで生活様式を改めようとする生活改革運動は、「自然に還れ (Kehrt zur Natur zurück)」⁴という標語に象徴されるように自然に即した生活様式が救済を実現するというメッセージをたずさえた活動を展開し、一方こうした救済を次の世代に継承・委託しようとする想定からは、「子どもから (vom Kinde aus)」という標語に象徴される新教育運動が繰りひろげられる。生活改革運動と新教育運動という世紀転換期にあらわれた改革運動は、いずれも自然を唯一のよりどころとしてマイクロコスモスとみなされる個人(人間)を改革することから出発し最終的にはマクロコスモスとして存在する社会(世界)を改革することを目指すものであったが、両者の関係は一ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913) の用語を援用するならば一前者が人間形成の理念の改革をみずからのなかで実現しようとする共時態 (synchronie) の発想を主軸とし、後者が人間形成の理念の改革を次の時代の担い手である子どもに実現しようとする世代交代すなわち通時態 (diachronie) の発想を主軸とするという相違をもつひとつの補完的關係にあったという理解が可能だろう⁵。

新しい時代の幕開けをみずからの手で直接的にあるいは間接的に切り開くべく改革運動にたずさわった人々が共通してよりどころとしていたのは自然であるが、そこには必ず「太陽」のメタファーが寄り添っていた。本稿は、「太陽」のメタファーが形成されたメカニズムおよび「太陽」のメタファーが果たした機能を、世紀転換期の改革運動—とりわけ新教育運動—の文脈のなかで読み解く試みである。

2. 生活改革運動における「太陽」のメタファー —モンテヴェリタを例として—

生活改革運動のひとつの拠点となるのはスイス南端に位置するティツィーノ州アスコーナのモンテヴェリタである。1900年、アスコーナにはベルギーの裕福な工場主の息子であるエダンコヴァン (Henri Oedenkoven, 1875-1935) とジーベンビュルゲン出身のピアニストであるホフマン (Ida Hofmann, 1864-1926)、ハンガリー出身でフーリエ (Francois Marie Charles Fourier, 1772-1837) の空想的社会主義および無政府主義の信奉者であるカルル・グレーザー

² Kerbs / Reulecke 1998, S. 16

³ 心身をひとつの全体 (Ganzheit) としてとらえる思潮はこの時代の指標である。(vgl. Harrington 2002, S. 65)

⁴ この標語はユスト (Adolf Just, 1859-1936) によって有名になる。(vgl. Schwab 2003, S. 39) ただし、「自然のなかへ (Hinaus in die Natur)」という表現はワンダーフォーゲル運動のもとですでに定着した標語であった。

⁵ 生活改革運動と新教育運動の関係については、包摂関係にあるという見解 (Rothschuh, K. E., Naturheilbewegung, Reformbewegung, Alternativbewegung, Stuttgart 1983, S. 113) と隣接関係にあるという見解 (Krabbe, W. R., Gesellschaftsveränderung durch Lebensreform. Strukturmerkmale einer sozialreformerischen Bewegung im Deutschland der Industrialisierungsperiode, Göttingen 1974, S. 105) の存在することが山名氏によって指摘されている。(山名 1998, 31 頁参照) なお、クラブ (Wolfgang R. Krabbe, 1942-) は生活改革運動と新教育運動の親和性を裏づけるものとして、①反合理主義、②「教育は個人に内在する本性に働きかけるべし」という生気論的前提、③教育目標として人格の全体性の理念をかかげる理論構成、という三点を指摘している。(vgl. Krabbe 1974, S. 105)

(Karl Gräser, 1875-1915)、その弟でインド哲学に造詣の深いボヘミアンであるグストー・グレーザー (Gusto Gräser, 1879-1958)、さらにプロイセン出身で市長 (官吏あるいは鉄道技師という説もある) の娘であるハッテマー (Lotte Hattemer, 1875-1906) によって、資本主義の搾取に抗議して自然に即した生活様式を取り戻すため「共同的な個人主義」を旗印とする共同体がユストの自然療法施設「ユングボルン (Jungborn)」に範をとって創設され⁶、入植先に決定されたこの小高い丘には一それまで地元で用いられていた名であるモネシア (Monescia) に代わって一「モンテヴェリタ (Monte Verità)」すなわち「真実の山」という名が与えられる。⁷ モンテヴェリタには共同体の理想を具体的に実現するため、また経済的な運営を可能なものとするため、菜食、日光浴、水浴、自然気胸による自然療法に特徴づけられるサナトリウムの併設がすすめられ、ここにヨーロッパ全域から注目され後にはひとつの伝説となる自然療法施設 (Naturheilstalt) が誕生する。

モンテヴェリタの宣伝活動の一環として、ホフマンは1906年に『モンテヴェリタ、詩のない真実 (Monte Verità, Wahrheit ohne Dichtung)』を著している。この表題は一見して明らかであるようにゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)⁸ がみずからの自叙伝に副題として冠した『詩と真実 (Dichtung und Wahrheit, 3 Teile 1811-14, 4. Teil 1833)』を意識したものである。ホフマンは「詩のない真実」という副題を与えながら⁹、この著作のなかでヨーロッパの人々がイタリア語圏文化に対して投影するイメージ—南国、太陽、解放、自然—をモンテヴェリタの魅力として最大限に詩的に演出・鼓吹している。ホフマンによればモンテヴェリタは「より高次の生のための学校 (Schule für höheres Leben)」であり、そこではわれわれの生は「われわれのなかに啓示されることになるあらゆる意志を内包する太陽光線 (Sonnenstrahl) によって実り豊かなものとなる (傍点筆者)」¹⁰ とされる。生活改革運動の拠

⁶ エダンコヴァンとホフマンは、日光浴を軸とする自然療法を確立したことから「太陽の医者」(Sonnendoktor) と呼ばれるスイス人リクリ (Arnold Rikli, 1823-1906) が1855年にフェルデス (当時はオーストリア、現在はスロバキア) に開設した自然療法施設で1899年に出会い、理想の地に多様な生活改革運動の発想を集約した共同体をみずからの手で建設するという共通の目標をかかげて当時としては珍しい自由婚の形態で共同生活を送り、両者はモンテヴェリタの運営においても一運営資金がその大部分をエダンコヴァンの父親の投資に負っていたという事実もあるが一主導権をもつ。とりわけホフマンは七つの言語を自由に操り、さらに生活改革運動の理論的根拠を自然科学によって裏付けることのできる教養をあわせもつ芸術家であり、モンテヴェリタの広報活動にその才覚を存分に発揮している。

⁷ この命名には直接間接に『真実の人』すなわちトルストイ (Lew Tolstoi, 1828-1910) に対する敬意が働いたとされる。(vgl. Hanke 2001, S. 23)

⁸ 本稿のテーマである太陽のメタファーと関連付けて述べるならば、キリストの神性ではなく太陽の神性を崇拜するという意味においてゲーテもまた太陽崇拜の人であった。「私の本性のなかに太陽崇拜が宿っているかと尋ねられるならくりかえし『まったくそのとおり』と述べよう。というのも、太陽はもっとも高次なるものの啓示であり、しかもわれわれ人間 (Erdenkind) に知覚可能なもっとも強力な啓示なのだ。私はこの啓示のもとに光と神の創造力を崇拜する。これらに導かれることよってのみわれわれは活動するのであり、そして植物や動物はわれわれとともに存在することになるのだ。」(Goethe 1948, S. 770f.) ゲーテの世界観にあって太陽の聖性のもつ意味は大きい。太陽はあるがままですべてを証明しているのであり、侵してはならないものである。したがって太陽の光を科学的分析の対象としたニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) にゲーテは独自の色彩論をもって抗議している。

⁹ 「詩 (Dichtung)」という概念は文学におけるその基本的な用途・機能として「真実に変容を加えること」、「真実を実際より高くみせる解釈を加えること」を前提としており、したがってそこには「創作・フィクション・作り話・空想」といった含意が横たわっている。(vgl. Brockhaus - Enzyklopädie 1988, Bd. 5 S. 460ff.)

¹⁰ Hofmann 1906, S. 94

点として創設されたモンテヴェリタは、ホフマンに従えば、太陽を救済の力とする学校なのである。施設維持に必要な宿泊者数を確保するため、生活改革運動の原則の厳格な意味における遂行は宿泊者に対しては少しずつ緩和されるが、最後まで固執された食生活の原則においては、菜食を旨とし本来の食材がもっている「太陽のもつエネルギー (Sonnenenergie)」¹¹ を弱める加熱は避けることが強調されている。なお、他の生活改革運動のグループにもみられることであるが、モンテヴェリタにおける「自然への回帰」という標語はきわめて恣意的に解釈され、そこでは「原始への回帰」ではなく「自然的なものへの回帰」が意図され、文明化された社会を批判しながら（自然ではなく）文明の成果であるセントラルヒーティングをいち早く導入する、規範化された衣習慣を批判しながら身体そのものを自分たちの立てた規範に沿うように厳しく（自然ではなく）意図的に形成していくといったさまざまな矛盾を内包している。

モンテヴェリタにはその設立の趣意に共感あるいは関心をもつ文化人たちが集うようになるが、傑出した自己形成小説を手がけたヘッセ (Hermann Hesse, 1877-1962) もまたこの地に足跡を残している。ヘッセは1907年にはじめてモンテヴェリタを訪れ、とりわけその入植当初の成員の一人であるグストーとはヒンズー教のアーシュラマ修業体験の手ほどきを受けるなど1919年まで接触を保っている。ヘッセはときには賞賛をこめてときには皮肉をまじえてこのモンテヴェリタを舞台としたと推測される作品あるいはモンテヴェリタの住人をモデルとしたと推測される作品を執筆し、みずからのモンテヴェリタに対する憧憬と反発の交錯するアンビバレントな立場を浮き彫りにしている。このヘッセが1914年に書いた『森の住人』 (Waldmensch) は、太陽を主題とする新しい世界を体験する若者の自己形成の物語である。物語には従来の世界観に縛られた聖人と新しい世界観を求める—モンテヴェリタの住人を髣髴とさせる—若者が登場する。暗い熱帯雨林のなかに生活していた「森の住人」は森を神として崇め、森のもたらす暗闇 (Dämmerung) に対しては生命を保護する揺籃のような安心感を、太陽のもたらす空白 (weiße Leere) に対しては生命を奪掠する修羅のような恐怖感をいただいていた。¹² しかし、こうした教えをもたらす聖人に疑いの目を向けたある若者は森を越えて太陽とそこに広がる世界を見、太陽こそがすべてを解放する最上の神であると認識するにいたる。¹³

太陽を生命の根源ないしは生命の解放の象徴とみなす観念連合は、1914年当時、生活改革運動の多くの担い手たちにみられた「新しい形態の宗教」に共通した基盤として定着していたものであり、日光浴を中心にすすめる療養施設などを通じて広く一般にも受け入れられていたものである。太陽は「生命に供する (lebenspendend)」ものであり、さらには生命に「新生 (Wiedergeburt)」をうながすものでもある。¹⁴

生活改革運動にひとつの里程標を刻んだモンテヴェリタはしかしその後、1920年にエダンコヴァンとホフマンが新しい入植先をスペイン、さらにはブラジルに求めて転出したことによって生活改革運動史上の役割を終息させている。

¹¹ vgl. Ida 1905, S. 19

¹² vgl. Hesse 1975, S. 99

¹³ vgl. a. a. O., S. 105

¹⁴ 新大陸における生活改革運動の推進に大きな功績を残し、現在でもコーンフレークの発案者として知られているケログ (Harvey Kellogg, 1852-1943) は、みずからの自然療法を太陽と関連づけて「一ヶ月間日光浴すると二年間寿命が延びる」 (Wirz 2001, S. 130) と述べる。なお、ウィルツ (Albert Wirz, 1944-) によれば、ケログは身体を神の住まう寺院とみなすアドヴェンティストである。(vgl. Wirz 2001, S. 135)

3. 生活改革運動と新教育運動を結ぶ「太陽」のメタファー

— ツィンマーマンを例として —

モンテヴェリタをはじめとする生活改革運動にみられる太陽崇拝は、新しい宗教的枠組をもつものとして療法にばかりではなく広く人間形成に意味をもつもの、すなわち教育へ応用可能なものとみなされるようになる。ここではそのひとつの典型として、生活改革運動家であるスイス人ツィンマーマン (Werner Zimmermann, 1893-1982) における人間形成の理念を支える太陽のメタファーのもつ背景および作用を考察する。

ツィンマーマンがその活動の土台としている基本方針は、当時のスイスではモンテヴェリタの実践などにおいて定着をみていた生活改革運動のそれである。ツィンマーマンの関わった生活改革運動は、菜食主義、禁欲主義、エスペラント語普及、無貨幣経済、有機栽培農業、女性解放と多岐にわたっているが、なかでも 1927 年に裸体主義をかかげるスイス FKK 運動がおこされたときにはその設立メンバーの一人として、1932 年にチューリッヒ近郊に開拓集落シャッツアッカー・コロニーが開設されたときにはその理論的指揮者として、1934 年に新規の経済制度を指向する経済組織 WIR が発足したときにはその牽引力として活躍している。しかし、「われわれ自身ではなくわれわれの子ども達か (人間形成の理想とされる) 光り輝く太陽になるべきだ (傍点および括弧内筆者)」¹⁵ という通時態を意識した言明にみられるように、ツィンマーマンは生活改革運動家でありながらきわめて新教育運動に近い発想法をもつ人物である。

「おそらくヴェルナー・ツィンマーマンの『光に向かって (Lichtwärts)』は、教育の分野で比較的意義を獲得するにいたった生活改革の著作の唯一のものである」¹⁶ というクラッベの指摘にみられるように、ツィンマーマンは生活改革運動の精神を教育の領域に組み込むという試みに一多くの同時代の生活改革運動家たちが取り組みながらそれほど成果をあげられなかったなかで例外的にある程度一成功する。¹⁷ 『光に向かって』はモンテヴェリタの創設者たちがアスコーナを去って 2 年を経た 1922 年にベルンで刊行されている。1910 年代にベルンでの学生時代を通じて生活改革運動に関心を寄せはじめ、1913 年から 1919 年にかけては学校改革を目指しつつ学校教員としてラウターブルンネンに奉職したツィンマーマンは、当然『光に向かって』のなかにモンテヴェリタそのものについての言及をおこなっていないにしても一みずからの生活実践—とりわけ食生活および衣生活における生活実践—において親和性をもつモンテヴェリタの動向には注目していたと推測される。

1893 年にスイスのベルン州に生まれたツィンマーマンは、教育の新しい動向として注目をあつめる新教育運動の気運をスイスにもたらした新進気鋭の教育学者シュナイダー (Ernst Schneider, 1878-1957)¹⁸ が校長職をつとめるホーフヴィルの教員養成セミナーに 1909 年か

¹⁵ Zimmermann 1922, S. 6

¹⁶ Krabbe 1974, S. 105

¹⁷ 生活改革運動に包括的に関わったツィンマーマンがとりわけ熱心に推進した裸体主義においては当時、「裸体は純粹さへと教育する」というスレン (Hans Surén, 1885-1972) の標語に感化されて裸体主義の教育への応用がさまざまな視点から生活改革運動家たちによって目指されていた。(vgl. Krabbe 1974, S. 100)

¹⁸ シュナイダーは 1905 年、教育史分野の論文『18 世紀末のベルン州における田舎の小学校 (Die bernische Landschule am Ende des XVIII. Jahrhunderts)』でベルン大学哲学博士号を取得した後、ベルン州の教員養成にたずさわって、新教育運動に感化されながら新世紀の学校教育にふさわしい教員のあり方を模索することによって多くの革新的な提言を行っている。「制度中心の教育から個人中心の教育へ」の要求が高まる 19 世紀から 20 世紀にかけての世紀転換期にあってシュナイダーがとりわけ強い批判を加えたのは、「選別」という社会的機能を担わされている学校教育の在り方であり、この教育現実に対置される「こころの文化 (Kultur der Seele)」という新しい教育理念をかかげてこれを追求する新世代の教員をみずからの手で育成することにより、「児童中心主義」をうたう新教育運動をスイスで活性化させる先鞭をつける。(vgl. Oelkers 1996, S. 88)

ら1913年にかけて学び、シュナイダーの影響をうけて心理学や経済学に対する関心を深めるとともにドイツ青年運動や生活改革運動にも眼を向けるようになる。その後、6年間の教職生活に終止符をうったツィンマーマンは、1919年から1920年にかけて旅行家として世界にその見聞を深め、そこで育まれた思想を基礎とする生活改革運動を展開する。この時期の教育関係の著作として注目されるのは、1922年に刊行された「救済教育の本 (Ein Buch erlösender Erziehung)」という副題をもつ一上述の著作『光に向って』および1924年5月に創刊された雑誌「内面化と自己形成のための月刊誌 (Monatsblätter für Verinnerlichung und Selbstgestaltung)」すなわち『道 (Tao 後に Tau)』である。¹⁹

生活改革運動の精神に根ざした教育実践を説く『光に向って』は、人間形成の理念を「太陽」に象徴させ、太陽のメタファーで埋め尽くされた書である。²⁰『光に向って』という題名は具体的には「太陽に向って」を意味し²¹、この本の主旨は「われわれの子ども達を光り輝く太陽」にする「救済教育」を説くことにある。この著作のなかで人間形成の理念は「太陽の人 (sonniger Mensch / Sonnenmensch)」という比喩で語られる。ツィンマーマンによれば、「太陽のような (sonnig)」とは「光り輝く統一体 (eine strahlende Einheit)」²²の意であり、「太陽の人」とは「内的な調和を発光する人」、「あますところなく自分自身の本質と一体化した人、神的核心と一体化した人、良心と一体化した人」²³を指す。真実すなわち神はただ自己認識のなかにもみ存在すると考えるツィンマーマンは、「自己と一体となること」と「神と一体となること」を同一視する。²⁴したがって、ツィンマーマンが「教育の目的は太陽の人である」²⁵と述べる時、それは「教育の目的は宗教的な人である」²⁶と換言されうる。きわめて宗教的な響きをもつ「救済」ということばも、この文脈のなかでは「みずからの創造的な内的諸力の助けを借りて成し遂げる行為」²⁷にほかならず、したがってツィンマーマンが主張する「救済教育」は実質的には「自己法則への教育 (Erziehung zur Eigengesetzlichkeit)」²⁸である。「太陽の人」すなわち「宗教的な人」という教育の目的に到達するために必要とみなされる過程は、内面的知覚によって知りうるものみに心を注ぎ、外部から入り込んでくる認識を拒絶するという修養であり²⁹、この修養を完結させた「太陽の人」すなわち「宗教的な人」としてツィンマーマンが想定するのは、シュティルナー (Max Stirner, 1806-1856) の「唯一の人 (der Einzige)」

¹⁹ この雑誌は、宗教・教育・社会・経済・芸術・食物・衣服・入浴といった生活改革運動のキーワードを各号に特集し、これらに対するツィンマーマンの見解およびこれに対する読者の書簡を織り交ぜて編集され、1937年1月にゲシュタポ長官ヒムラー (Heinrich Himmler, 1900-1945) によってその刊行を禁止されるまで存続している。

²⁰ 生活改革運動家であったツィンマーマンがこの著書のなかで食生活に関し、楽園でアダムとイブもそこから恩恵を受けた「生き生きとした太陽の食事 (lebende Sonnennahrung)」すなわち果物の推奨、そして太陽エネルギーを損なわない「太陽料理 (Sonnenküche)」すなわち一かつてのモンテヴェリタがそうであったように一生食の推奨をおこなっていることも付記しておきたい。(vgl. Zimmermann 1922, S. 24f.)

²¹ vgl. Zimmermann 1922, S. 46

²² a. a. O., S. 8

²³ ebenda

²⁴ ここには自己のなかに救済を求めようとするこの時代独特の擬似宗教の典型がみられる。

²⁵ vgl. Zimmermann 1922, S. 8

²⁶ vgl. a. a. O., S. 103

²⁷ ebenda

²⁸ a. a. O., S. 109

²⁹ vgl. a. a. O., S. 103

イプセン (Henrik Ibsen, 1828-1906) の「第三帝国の人 (Mensch des Dritten Reiches)」、ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900) の「超人 (Übermensch)」、仏陀、老子、イエスといった「悟りを開いた人 (der Erlöste)」である。³⁰

「太陽」はツィンマーマンのもとで人間形成の理念の比喩としてだけでなく、その生活改革運動の実践のなかでも大きな位置を占めていた裸体主義および律動的体操 (rhythmische Gymnastik) との連関で登場する。³¹ 裸体主義および律動的体操については休暇を利用したキャンプや教育講習会といったみずから主催した実践体験をふまえて日本に届けられた 1930 年時点のメッセージを手がかりとした考察が可能である。

1930 年、前年にはじまる世界旅行の途上に日本の新教育運動の嚆矢と目される玉川学園をその黎明期に訪れたツィンマーマンは、玉川学園がヨーロッパの田園教育舎に対応するものであることを指摘し、この種の学校のもつ「大家族的共同体ないし生活共同体、自然との融合、健康、身体的実践的行動 (手仕事や庭仕事) によって補完・調和された精神的労作、いかなる使命にわれわれが内的に決定されているか、いかなる生活労作がわれわれに深い満足・充足を与えるかについて多様な可能性を感知・認識する」³² といった長所を確認したうえで、もし自分が帰国の後に理想の教育施設を開く場合の着眼点として「宗教」、「栄養」とならべて「体操」に関する独自の構想をあげている。

「体操」とは古代ギリシアにあっては「衣服をまとわない身体のもとの肉体的鍛錬」³³ であり、ツィンマーマンはこの本来の意味の体操が近年のヨーロッパで青年運動や新教育のなかに再興されていることに喜びを示している。³⁴ なぜなら、これは「誠実性、信頼性、心身の健全性、純粹性に関するあらゆる問いに対する根本的で重大な革命」³⁵ を意味しており、みずからも「会員制の団体のなかで、(…) 男女の区別なく一糸まとうことなく光と太陽、そして大気と水を浴しながら駆けまわ (傍点筆者)」³⁶ る実践をおこなっていることを紹介している。³⁷

さらにそこで行われている「身体をわれわれの魂とわれわれの精神の表現器官にすることを目標」³⁸ した独自の律動的体操に言及し、「私が優れたそして豊かな音楽にあわせて律動的に踊っ

³⁰ vgl. a. a. O., S. 12

³¹ 裸体主義は当時の新教育運動の担い手にとって疎遠なものではなかった。ここではゲヘーブ (Paul Geheeb, 1870-1961) のオーデンヴァルト学校で「朝の裸体体操 (morgendliche Nacktgymnastik)」が「空気浴 (Luftbad)」の名のもとに実施されていたことを指摘しておきたい。

³² Zimmermann 1930, S. 72

³³ a. a. O., S. 73

³⁴ 「日本民族は自然、身体、そしてあらゆる事象に対して、一病的なまでに過度に文明化されその内面においては不誠実となってしまった多くの西洋の人間とは対照的に一創造者がそれらをまったくの純粹性のうちに創造したように、無邪気な心のままで向き合っている。(…) 日本がその魂にこういった不吉なもの [肉体を不浄で罪深いものとみなす態度] をよせつけないことを望む! (傍点および括弧内筆者)」(Zimmermann 1930, S. 75f.) 「自然に還れ」を標語とする生活改革運動を推進したツィンマーマンにとって、日本の日常はまだ西洋の人間が意識的に「回帰」すべき場所とみなしているひとつの理想的な段階にふみとどまっているという感想をもっている。

³⁵ Zimmermann 1930, S. 75

³⁶ a. a. O., S. 73

³⁷ ツィンマーマンは、裸体主義が健康上のぞましいことが明らかであるにもかかわらず多くの人々が反対していることに遺憾の意を示し、そういった人々は裸体主義が精神上、教育上にもつ効果を見逃していると考えられる。(vgl. Zimmermann 1930, S. 75)

³⁸ Zimmermann 1930, S. 76. ツィンマーマンは「これはあらゆる本質的なものをそのなかに含んでいる。したがって、単なる働き者や兵士への鍛錬とは異なる!」ことを強調している。

てみせたとき、どれほど真剣に、そしてどれほど感動してここ玉川学園の子どもたちが私を見つめていたか。私は心の底から嬉しく思う。これはすべて日本の魂に宿っているのであり、たださらに自覚めさせられる必要があるだけなのだ！（傍点筆者）³⁹と主張する。自己と神を同一視するツィンマーマンにあって、みずから編み出した律動的体操は身体を聖化する手段として認識されている。そして、この聖化の過程は律動的体操をまだ知らない日本民族にも意識はされていないもののきちんと宿っているとみなされるのである。

ツィンマーマンは、新教育運動が西洋から東洋へという一方向性に支配されていたなかで、東洋の新教育運動を西洋に紹介することを試みた稀有な存在である。教育理論としては多くの新教育運動家がそうであったように宗派性を乗り越えた宗教性をもつ教育的価値を主張し、この立場を共有する日本における新教育運動の草分け小原国芳の紹介をヨーロッパの教員連盟および生活改革連盟において行うことに力を入れている。⁴⁰ 教育および宗教についての多くの発言をしたツィンマーマンはさらに広い視野から東洋に注目し、老子、クリシュナムルティ (Jiddu Krishnamurti, 1897-1986)、ガンジー (Mohandas Gandhi, 1869-1948) の思想の普及のために多くの刊行事業にたずさわっている。これらの活動を買っているのは、西洋にはすでに失われ東洋にはまだ残されたものへの一生活改革運動の担い手を地下水脈のように結んでいる一憧憬であり、人間形成の理念として登場する「太陽」というメタファーもまたこの憧憬の延長線上に位置づけることができる。

4. 東西の人間形成の理念の融和点としての「太陽」のメタファー

教育の標語として「太陽」ないし「光」が主役として登場したのは啓蒙時代である。18世紀、銅版画の第一人者として多くの啓蒙書の装丁を担当したホドヴィエツキ (Daniel Chodowiecki, 1726-1780) は、「啓蒙」という表題をかかげる挿絵に森を後に「太陽」へと進路をとる馬車を描き出している。啓蒙とは暗がりに潜む迷信に背を向けて明るく照らし出された理性へと向うことを意味し、「太陽」は「理性」の象徴、さらに理性への信頼にもとづく「自由」そして「幸福」の象徴として燦然と輝いている。⁴¹ 「太陽」のメタファーはそのまま啓蒙時代と称される18世紀の人間形成の理念として教育を語るさいに好んで引き合いに出されることになる。

一方、19世紀から20世紀への世紀転換期には、生活改革運動さらにこの運動と密接に結びついて展開した新教育運動のなかで新しい人間形成の理念として「太陽」のメタファーが再浮上する。改革運動を偶像化する多くの作品を手がけた一そして友人としてツィンマーマンの教育書『光に向って』の装丁を担当した一フィドゥス (Fidus/Hugo Höppener, 1868-1948)

³⁹ ebenda

⁴⁰ ツィンマーマンは、1931年にはドイツ、スイス、オーストリアにおける、1955年にはドイツ、スイス、オーストリア、ノルウェー、フィンランドにおける小原の講演旅行を手配し、1954年にはその著作『東方の光—精神的日本— (Licht im Osten, Geistiges Nippon)』のなかで一章をさいて小原教育の紹介、1965年には『未来の学校—小原国芳の生涯と事業— (Die Schule, der die Zukunft gehört. Leben und Werk von Kuniyoshi Obara)』と題する著作の刊行をおこなっている。1971年にはグロスマン・メトードの考案者であるグロスマン (Gustav Grossmann, 1893-) に推薦をおこない、同氏によって設立されたグロスマン賞を小原に受賞させている。一方、ツィンマーマンは「小原学校をヨーロッパに建設する」というグロスマンの提案に対しては、「それが単なる模倣の域を出ないものであるなら建設すべきではない」と否定的な見解を表明している。(vgl. Zimmermanns Brief an Grossmann)

⁴¹ vgl. Im Hof 1983, S. 116

は、「光の希求 (Lichtgebet)」という表題をかかげる挿絵に「太陽」に向かって高く両手を差し伸べる裸身の一中性的な一若者を後方から描き出している。⁴² 人間形成の理念は工業化・資本主義化した機械的社会に背を向けて人間の本来性そして生命の根源性へと向うことを指向し、「太陽」は「感性」の象徴、さらに感性を解放する「自然」の象徴として機能する。

ツィンマーマンによって言及された人間形成の理念としての「太陽」はその根幹を生活改革運動にもつが、ウルブリヒトの解釈では、この時代、生活改革運動およびこれと連動性・親和性を有する新教育運動は従来の宗教と一線を画する新しい意味での宗教性を模索している。これらの改革運動の核心に横たわる新しい意味での宗教性は、クラブの指摘によれば、「世俗化したグノーシスの終末論的救済論」⁴³ と規定されうるものである。そこでは、人類が「楽園」から出発し「墮罪」を経由して「救済」へと到達するという歴史観がもたれ、自然に背を向ける「墮罪」に陥ったわれわれは、自然に適應することによってのみ「救済」されうるという理論が唱えられる。グノーシスへの言及はウルブリヒト (Heiner Ulbricht, 1942-) にもみられる。ウルブリヒトの解釈では、この時代、「個人の自己認識」が「内的世界の救済への決定的な道」⁴⁴ として再発見され⁴⁵、そこから生じた超越的創造者を否定した外部の創造者を否定するという認識から、みずからの行動あるいは身体を聖化するという傾向が生まれてくることになる。⁴⁶ 「ひとりひとりのなかに宿る神すなわち自分自身 (Gott-Ich jedes Einzelnen)」⁴⁷ に対する最大級の崇拜を訴えて裸体主義および律動的体操の実践による救済教育を唱導したツィンマーマンの思想的基盤もここに帰することができる。

自分の外部にではなく自分の内部に神性を求める理論の構築をめぐる注目されたのは東洋の宗教である。リンゼ (Ulrich Linse, 1939-) によれば、東洋の宗教や東洋に導かれた哲学は、自己意識を高めるという目的のために大きく貢献する。⁴⁸ 東洋の宗教への関心は早くはショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) によって学者に目覚めさせられることになるが、世紀転換期には 1875 年にニューヨークで設立され 1884 年にはドイツさらに 1897 年にはオーストリアで設立された神智学協会 (Theosophische Gesellschaft) によって芸術家をはじめ多くの文化人に共有されるにいたっている。そこでは、「ヨーロッパの教養ある市民がもつ救済の必要性を表向きアジアの宗教性という感性上きわめて要求の高い融合物 (Amalgam) (Meike Sophia Baader, 1959-) によって満足させる」⁴⁹ という魅力が横たわっている。東洋の

⁴² フィドゥスの「光の希求」と同じ構図がモンテヴェリタでは「太陽崇拜 (Sonnenkult)」として採択されている。(vgl. Schwab 2003, S. 109)

⁴³ vgl. Krabbe 1998, S. 74, Krabbe 1974, S. 103f. グノーシス的な発想はキリスト教の成立に先立って存在し、キリスト教からは異端視されているが、キリスト教の内部にもグノーシス的な発想を展開させた流れが確認される。たとえば、神的な炎から放出される内なる光にしたがえば救済されるとするクエーカーの考え方にも反映されている。

⁴⁴ Ulbricht 1999, S. 155

⁴⁵ たとえば、人智学を打ち立てる以前、まだ神智学を支持していた時代のシュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) は初めてみずから発刊を手がけた雑誌に『ルシフェル (Lucifer)』という名前を与えている。

⁴⁶ vgl. Ulbricht 1999, S. 156. 自分の内部に神性を求めるという心性は、近代以降の教育にみられる宗教の新しい形態としてケレンツ (Ralf Koerrenz, 1963-) やコルマル (Norbert Collmar, 1958-) が「開放型のあるいは隠匿型の個人的宗教にみられるモダンあるいはポストモダンの形態、自己の理解や生命の解釈にみられる擬似宗教の形態」(Koerrenz/Collmar 1994, S. 1)と指摘したものに重なる。

⁴⁷ Zimmermann 1922, S. 108

⁴⁸ vgl. Wedemeyer 2001, S. 100

⁴⁹ Ulbricht 1998, S. 497

宗教のもつ魅力はまたバーダーによれば、「神ではなく悟りを開いた人間が主役とされ、仲介者・制度を必要としない自己救済であること」、「身体崇拜 (Körperkult) を中心におき、宗教性の自己完結が可能であること」⁵⁰、という二点に集約される。世紀転換期の改革運動の一環をなすものとして展開された新教育運動においても、東洋の宗教への関心は顕著である。新教育運動の奔流とも呼べる流れを生み出した田園教育舎運動にかかわった教育学者を一瞥しただけでも、ゲヘープらはインドに西洋と東洋を交感させる学校を設立した詩人であるタゴール (Rabindranath Tagore, 1861-1941) と接点をもち、リーツ (Hermann Lietz, 1868-1919) は中国に道教を生み出した老子にひかれ、さらに日本を西洋に紹介する作家ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) に注目した論考も教育雑誌に数多く掲載されている。

新教育運動の理解が西洋に端を発し東洋へと伝播して世界的な広がりをもつにいたったとされる教育史認識のなかで、東洋から西洋へという逆のベクトルももっと注視されてよいのではないかという思いを筆者は長くもっている。東洋における新教育運動の受容過程において西洋の新教育運動のもつ宗教性は歪曲ないし軽視されたという見方が一般的であるが、日本における新教育運動の受容にみる限り、多くの新教育運動家がキリスト教と関わりをもっていたこと、さらに日本の宗派宗教のなかで大きな勢力をもつ浄土真宗がキリスト教にきわめて近い教義をもっていることに注目するならば、西洋の新教育運動に内在する一とりわけキリスト教に根ざす一宗教性が日本における受容の障害物ないし余計物として存在したという解釈は必ずしも妥当とはいえない。⁵¹ さらに、東洋の宗教性がそもそも西洋の新教育運動の精神構造に意図的に組み込まれていたという改革理論の生成過程に注目するならば、西洋の新教育運動を受容する東洋には精神構造のうえで受け皿としての条件はすでに一限定つきではあるにしても一予定調和的に整えられていたと考えられる。

新教育運動における「太陽」あるいは「光」というメタファーは、宗教という外観を溶暗させてその実質を継承した美的なものを志向する時代の要求によって生じたものである。そしてそこに横たわる自己救済という枠組には東洋の宗教がきわめて多くを供しようということが世紀転換期には広く認められる。ここに、自分の感性に信頼を寄せることの帰結として感性による宗教性の代替が確立する。ウェーバーは、合理主義の時代には「芸術が秩序ある体系としての世界を具現する固有な価値をいっそう意識的にわかりやすく自立して産み出すようになり (中略) 内面的世界の救済の役割を引き受けることになる」⁵² と説く。宗教の代替として一自分の感性への信頼そして美的なものへの志向に支えられた一芸術が台頭してくるという現象は、合理主義が飽和状態に達することによって惹起されるのであり、それゆえに19世紀から20世紀への世紀転換期における一回性の現象ではなく、21世紀に足を踏み入れた現代にもまた深く関わる現象である。

⁵⁰ vgl. Baader 2002, S. 92

⁵¹ vgl. Ito 2001

⁵² Weber 1988, S. 555

【参考文献】

- Baader, M. S.: Erziehung als Erlösung. Religiöse Dimensionen der Reformpädagogik. In: Zeitschrift für pädagogische Historiographie. Nr.2. 2002. S.89–97
- Brockhaus-Enzyklopädie. Mannheim 1988
- Goethe, J. W. v.: Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche. Bd.24. Zürich 1948
- Hanke, E.: Der Mann der Wahrheit. Die Ideen Leo N. Tolstois und der Monte Verità. In: Schwab, A. / Lafranchi, C. (Hrsg.): Sinnsuche und Sonnenbad. Zürich 2001. S.23–42
- Harrington, A.: Die Suche nach Ganzheit. Die Geschichte biologisch-psychologischer Ganzheitslehren. Vom Kaiserreich bis zur New-Age-Bewegung. Reinbek bei Hamburg 2002
- Hesse, H.: Der Waldmensch (1914). In: Hesse, H.: Die Märchen. Frankfurt am Main 1975. S.99–105
- Hesse, H.: An die persischen Leser des »Siddhartha« (1958). In: Hesse, H.: Gesammelte Werke Bd. 11. Frankfurt am Main 1970. S. 50
- Hofmann, I.: Vegetabilismus! Vegetarismus! Bellinzona 1905
- Hofmann, I.: Monte Verità. Wahrheit ohne Dichtung. Ascona 1906
- Im Hof, U.: Enlightenment – Lumière – Illuminismo – Aufklärung. Die „Ausbreitung eines besseren Lichts“ im Zeitalter der Vernunft. In: Svilar, M. (Hrsg.): „Und es ward Licht“. Zur Kulturgeschichte des Lichts. Bern 1983. S.115–135
- Ito, T.: Die innerliche Erbauung als Grundlage der Reformpädagogik. Die Landerziehungsheim-Bewegung in Deutschland und ihre Nachfolger in Japan. Halle 2001 Ms.
- Kerbs, D. / Reulecke, J. (Hrsg.): Handbuch der deutschen Reformbewegungen 1880–1933. Wuppertal 1998
- Koerrenz, R. / Collmar, N. (Hrsg.): Die Religion der Reformpädagogik. Ein Arbeitsbuch. Weinheim 1994
- Krabbe, W.R.: Gesellschaftsveränderung durch Lebensreform. Strukturmerkmale einer sozialreformerischen Bewegung im Deutschland der Industrialisierungsperiode. Göttingen 1974
- Krabbe, W. R.: Lebensreform / Selbstreform. In: Kerbs, D. / Reulecke, J. (Hrsg.): Handbuch der deutschen Reformbewegungen 1880–1933. Wuppertal 1998. S. 73–75
- Oelkers, J.: Reformpädagogik. Eine kritische Dogmengeschichte. Weinheim 1996
- Oelkers, J.: Schulreform und Schulkritik. Würzburg 2000
- Schwab, A.: Monte Verità – Sanatorium der Sehnsucht. Zürich 2003
- Surén, H.: Der Mensch und die Sonne. Stuttgart 1924
- 上山安敏: 世紀末ドイツの若者 講談社 1994
- 上山安敏: 神話と科学 ヨーロッパの知識社会 世紀末～20世紀 岩波書店 2001
- Ulbricht, J. H.: Religiosität und Spiritualität. In: Kerbs, D. / Reulecke, J. (Hrsg.): Handbuch der deutschen Reformbewegungen 1880–1933. Wuppertal 1998. S.495–498
- Ulbricht, J. H.: Lichtgebet und Leibvergottung. Annäherungen an die Religiosität der Freikörperkultur. In: Grisko, M. (Hrsg.): Freikörperkultur und Lebenswelt. Studie zur Vor- und Frühgeschichte der Freikörperkultur in Deutschland. Kassel 1999. S.141–178
- Weber, M.: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie. (1920) Bd. 1. Tübingen 1988
- Wedemeyer, B.: Ich-Kultur und Allerlei Sport. Der Monte Verità als Initiator und Spiegelbild neuer Körperkonzepte. In: Schwab, A. / Lafranchi, C. (Hrsg.): Sinnsuche und Sonnenbad. Zürich 2001. S.90–103
- Wirz, A.: Sanitarium, nicht Sanatorium! Räume für die Gesundheit. In: Schwab, A. / Lafranchi, C. (Hrsg.): Sinnsuche und Sonnenbad. Zürich 2001. S.119–138
- 山名淳: 教育と自然療法 『日常生活の政治学』(神戸市外国語大学外国学研究) 所収 1998 25–71 頁
- Zimmermann, W.: Lichtwärts. Ein Buch erlösender Erziehung. Bern 1922
- Zimmermann, W.: Aussprache. In: Tao Nr. 1. (Religion) 1924. S.26–29
- Zimmermann, W.: Ziele der Erziehung. In: Tao Nr. 30. (Erziehung I) 1926. S.1–5

伊 藤 敏 子

Zimmermann, W.: Freie Erziehung. In: Tau Nr. 39. (Erziehung II) 1927. S.23—24

Zimmermann, W.: Einige Gedanken über Erziehung und Tamagawa Gakuen. 1930 (学園日記 第12号) 71—77頁

Zimmermann, W.: Mahatma Gandhi. Lauf-Nürnberg 1931

Zimmermann, W.: Krishnamurti. Zielbrücke Bern 1937

Zimmermann, W.: Licht im Osten. Geistiges Nippon. München 1954

Zimmermann, W.: Die Schule, der die Zukunft gehört. Leben und Werk von Kuniyoshi Obara. 1965

謝辞：ツィンマーマンの文献についてはコンラート・ツィンマーマン氏に私信をふくめた書簡などの詳細な示唆を得た。ここに記して感謝したい。

また、ヘッセの文献についてはモンテニョーラ・ヘッセ・ムセオ館長レギーナ・ブーハー氏に詳細な示唆を得た。ここに記して感謝したい。